

現代の都市・農村の再生と広域発展

－文化資源を活かす地域再生の構想－

池上 惇（京都大学名誉教授）
monjyubunko@hotmail.co.jp

はじめに－現代の職人技による地域の再生

大野 晃『限界集落と地域再生』（河北新報出版センター、2008年）は、現代の限界集落を解明した労作である。

この書の冒頭、グラビヤの最終ページに次の言葉が掲げられている。

「日本列島‘限界集落’－明日が輝く」

「来年のこともわかからぬ歳なれど夢をいだいて花種集める（まきこ）」

そこには、春を告げる高知のミツマタ、赤くて手毬に似た、小さな花々の集合。その上部に長野県北相木村、井手まきこさんの、ひょうきんで、明るい笑顔。洋装の彼女には自然な草花のデザインが自然色で輝き、それに黒髪が映える82歳。

大野教授は、「限界集落」という概念を日本地域経済社会の研究の中で確立された。氏の分析によれば、1960－2000年において富山県の人口は、8.5%増加した。しかし、2000年から2030年の間に、15.3%という大幅な落ち込みが予想されている¹⁾。

この傾向を強めているのは、富山市や高岡市など、相対的に多きな市域における人口減の予測である。都心の空洞化と呼ばれ、郊外化を伴う傾向であろう。同都市の人口減少率は10－20%、高齢化率は、30%を越えると予想されている。農村部では、平村、細入村が、40%以上、利賀村が30%以上の減少と予測されている（同上、207ページ）。

都市では、商店街の衰退、小売事業の撤退が目立ち、買い物貧困と呼ばれる不便で厳しい日常生活環境が表面化している。

その一方で、富山は、立山連峰をはじめとする卓越した景観を背景に、農林漁業の伝統や、職人経済、大都市と連携した産業振興、伝統的な薬品や金属工業があり、西洋や東洋に跨る芸術文化振興政策や文化財保護、など、貴重な実績がある。

本日の報告では、日本全体の中心課題である 限界集落と職人経済による再生に焦点をあわせる。そして、農村の再生を都市再生に繋げる、広域的な発展の方向性を考えていく。

I 地域再生と職人経済

1. 限界集落の問題提起

限界集落は貴重な価値を持つ。そこには、豊かな自然環境と、近隣の人との温かな繋がりのもとで、長年の職人技を蓄積された人々が居られる。

そして、人手が不足するために、耕作が困難となる棚田や、下草や下枝の刈り取りが困難となる森や林。これらの厳しさにもかかわらず、住居の周囲には、美しい景観と豊かな自然がある。水は美しく住み、大気は清浄で並ぶものがない。

さらに、限界集落には、その地に固有の自治の習慣、治山治水の智恵や技術が暗黙の知として存在する。大野教授がとくに、注目されているのは、水源と水系が創り出す‘人々のつながりや伝統’の持つ価値である。これらは、場合によれば、忘れられているかもしれないが、流域における共同の営みをつくりだし、限界集落を再生させる鍵であり、潜在的な結集力である。

多くの暗黙知は、聞くことや、伝承や記録、など、地道に辿れば発見できる。同様に、地に適した竈や調理器具、日差しを遮り、皮膚を守る作業衣や農作業の帽子など、独自の暮らし方も興味深い。

夫婦の協力関係や祖父母との交流、家族と自然に中での子育ての智恵もある。しばしば、建築家を感動させる、建築の素材や技術。

比べるもののない伝統の田舎料理の姿や味。農業や地場産業を営む智恵、都市との交流や付き合いかた、旅人との対話や待遇のやさしさ、独自の運搬や交通の手法。

生きるための智恵や生活の技術が生み出す‘暗黙知’の価値。

大野教授は、これらの‘宝の山’を、地下足袋にハンチングという‘いでたち’で、農家の庭先で、語り合われる。

実証の方法は、一方では、克明なヒアリングであり、それを手がかりに、限界集落を生み出す要因を一つ一つ解明され、それらを相互に関連付けて全体像を示す手法である。

そして、他方では、日本列島全体に関わる市町村別の人口減少と高齢化に関わる数値の比較によって、各地域に固有の限界集落化を各地ごとに、特徴づけられて行く。

経済の効率化や貿易上の都合で、あるいは、政治の動くままに、振り回されてきた限界集落。だが、いま、その価値を明るみに出し、可能性を開く方向性が示唆された。

2. 職人技の評価

関口暁子「伝統工芸の発展形」2)は、「職人とは何か」を解明した労作である。

同氏は、「北陸先端科学技術大学院大学、石川伝統工芸イノベータ養成ユニット」における、養成コース二期生の九谷焼作家、佐久間忍氏制作の‘マイちょこ’を手がかりにして、現代の職人増に迫ってゆかれる。

この九谷焼は、素晴らしいデザインで、いかにも、使い易そう。そして、伝統的な加

賀友禪の袋。

一番の注目は、「・・・日本は百年以上続く老舗の会社が世界で最も多く、伝統工芸で培ってきた職人技が現代の先端技術をも支えているという事実」である。優秀な職人たちと、それを理解する国民こそ、日本文化の誇りである3)。

伝統工芸の生産は、人から人へと‘つながる’なかで、名人らから伝えられてきた技術だけでなく、妥協を許さない自立した精神性を育てる。

記事を読んでいるうちに、新しい職人像のイメージが明らかになってきた。

昔は、とくに、戦前の日本では、職人の世界には‘パタナリズム’‘徒弟制度’と呼ばれる上意下達の鉄則があり、親方が弟子に対する、一種の「経済外的強制力」を持っていた。しかし、戦後の民主化や家族法の改革によって、いまや、学校で学ぶ自由な精神を持つ職人が登場した。そこには「自覚的意思と思想」をもつ職人が登場する。

この新職人は、芸術家と同様に、芸術的表現の技術を持ち、同時に、創造的な自立の精神を持つ。

この自由への道は、決して、恣意、すなわち、自己の利益追求の自由を意味しない。そして、よりも‘他’への義務を果たす自由を追求する。

では、‘他’への義務を果たす自由とは何か。‘他’とは何だろう。

例えば、陶磁器を扱うとき、かれらは、素材を一方的に、かつ、人工的に染め上げるのではなくて、素材のよさを活かす力を持つ。この力は、自然を敬愛する人格と、時間と労力を費やした自覚的な修練を通じて生み出される。新職人は、自立を背景に、自由で開かれた発想をもちつつ、この自由を生かして自然の齎した素材の潜在的な‘美と用’（美しく使って楽しい実用性）を、顕在化する。

また、自然とのコミュニケーションを重ね、それを深く知る‘営み’、すなわち、植物や動物を育て、火や水で鉱物を変化させて仕事や生活に活かす中で生み出されてくる。

工芸においては、彼らは、自分の関わる自然の素材の構造をよく知って、加工し表現する。そして、無理のある加工・表現は、自然の痛みとなり、内部構造に添った加工や表現は、自然の歓びとなるかのように感じる。彼らは、仕事と生活に地域固有の自然、景観、資源などを活かして生き抜く。

そして、自分が、作品をつくり、表現できるのは、自分の恣意によるものではなくて、自然によって自分が生かされ、教えられた結果であると考ええる。

彼らは、自然の象徴である天や地、あるいは、先人の限りない教示や愛情によって、生かされているとの‘謙虚な自覚’をもつ。これは、自己を自然や歴史の‘うみだしたもの’、あるいは、それらの一部として自覚しつつ、自己抑制することを意味するだろう。

新たな職人は「自然によって生かされていることを自覚し、感謝し、自然の恩の応える」。

Ⅱ ラスキンの産業実験—職人経済の再生による地域の復興

職人の技や経済は、大量生産社会において、「効率」高めるために排除されることが

多い。量産は、規模の経済を促進するので、多品種少量生産や、質の高い財を創り出す職人経済は、採算上の理由で機械生産に置き換えられる。

しかし、この排除されたものは、長い目で見ると、職人による創意工夫や、蓄積された伝統的文化の継承・発展によって、生活の質を高める製品やサービスを生み出す可能性も高い。

この可能性を追求する構想を推進したのは、19世紀の後半に活躍した、文化経済学者、J.ラスキンであった。

彼は、衰退産業が残した資産と専門性・職人性を基礎に、地域からの産業実験を提起している。これは、聖ジョージのギルド事業と呼ばれた多様な試みの一つとして、貴重なアイディアを残した。この事業は、ラスキン全集に収録され、記録を残した、A.フレミングによれば、この産業実験の内容は以下の通りであった4)。

- 1) イギリスのマン島において、当時、伝統産業であった毛織物工業が、経営の危機に直面して、撤退した。この結果、伝統産業の担い手であった、すぐれた技巧を持つ熟練した職人たちは、仕事を失い、離散してゆく。地元に残ったものでも、その職人技を活かす機会はない。そして、優れた知的所有者たちは、失業に直面し、若者や青年層は村を離れることを余儀なくされる。生産手段である、織機は売られたり放置されたりして、忘れられようとする。
- 2) 大半の人々は、これは必然的な法則に基づく自然な傾向であるという考えであった。これに対して、ラスキンは、ここで創られ、地域社会の共同の財産として残された伝統産業の生産や経営のノウハウは、自然を基礎とした、人々の努力と創意工夫の結晶であり、個々の職人の技は、尊敬に値する芸術的作品を生産しうると評価していた。そして、優れた製品の質を評価し、享受する消費者に、これらの技を伝え、市場を開拓することによって、これを再生させることが、人間社会の進歩であると主張した。
- 3) そこで、ラスキンは、伝統と文化を継承する意思や決意をもつ人々、とりわけ、都市の市民から出資を募り、その資金によって、高齢化し、体力が低下した労働者たちを激励しつつ、雇用の機会をつくりだした。また、資金を投入して水車小屋を作り、自然エネルギーを再生し、供給しようとした。現代であれば、エコロジーの視点をもつ、この試みは、同時に、文化的で、ロマンティックで、景観としては、美しい動力源を担う水車小屋となったのである。この小屋は、地域に分散して生活する職人や農民の共通の広場となった。
- 4) この広場は、地域社会の共通の財産である、優れた職人技や、固有のノウハウによって支えられ、アイディアや技能、技術を共有する職人たちの「交流の場」となった。そこでは、他の地域との接点を持つ販売活動や、古い時代から継承されてきた、物々交換の場ともなった。農民たちは水車小屋に羊毛を持ちより、完成された織物、もしくは家庭での編物に使用する生糸のどちらか一方が返礼として支払われた。加えて、彼らは、貨幣をも、自分たちの知的な所有としてのルールと契約によって制御しうる物的財産に変えようとした。これは、一種の地域通貨の導入であ

り、ラグザリーのホームスパン一平方ヤードが、聖ジョージのギルドの通貨における価値基準であったとされている。

- 5) この産業の多くの生産物は実用性と共に、美しいものを受け入れて生活様式を変える潜在能力を持っていたので、聖ジョージのギルドにおける協同組織とネットワークは、産業の実験のための市場を開発した、とされている。

以上のような「産業実験」試みは、崩壊した地場産業の現代的な再生事業であった。それは、「効率」の視点から見れば淘汰されたはずの職人技や伝統文化を、「現代の農村と都市」という広域的な視点から再生する試みであった。

ここでは、「効率」という視点から開発された「都市と農村の交流を支える鉄道や道路、両者を結合する通信手段、生産における技術的な進歩のうち、手仕事の再生に貢献する機械の利用（灯かりをもたらすガス燈、のちには電気エネルギー）などを、職人技の発展、再生に活用する新たな機会が生み出される。

さらには、製品の品質やデザインを、現代の消費者が要望する芸術性（洗練されたデザインなど）や機能性（保温性や繊細な感触）に対応して変化、発展させる試みが提起される。

Ⅲ 職人技の学習・交流と地域再生

杉村和彦『21世紀の田舎学—遊ぶことと、作ること』（世界思想社、2009年）は、福井県今立の和紙職人の技や人格から、和紙作りの体験学習を通じて、学習と交流の組織や事業を生み出し、田舎の生活様式を再生する過程で、和紙産業の発展や、訪問・観光事業の進展を準備する5）。

また、古民家の再生、グリーンツーリズムなどによって、田舎を再生し、都市との人的交流を持続的に発展させる。このなかで、伝統や習慣を再生し、忘れられようとしている言語やしきたりを見直し、現代生活に活かす方向を考える。

豊かな自給性や技能の自在性は、アフリカやフランスの田舎との共通の基礎となり、文化交流の手がかりを創り出す。

これらの新たな傾向を視野に入れた産業実験の手がかりは、以下の点で、現代に通じるものがあり、今後のコミュニティ・ビジネスや、まちづくり論の基本方向を示唆している。

- 1) 現代産業は、大量生産大量消費・大量廃棄型から、多品種少量、さらに、微小で、ナノテク、バイオテクを活用する「省エネルギー、資源節約」型へと変化しており、大型の株式会社所有を典型とするたい企業経営は、多くの困難に直面している。その一方で、農林漁業など、分散的な地域産業が、新たな技術を活用し、職人技を復活させて再生する動きが生み出されている。この転換は、各地に、地産地消の傾向を生み出しており、現地でつくり、現地で消費し、現場を訪問して生産を体験し、消費を楽しむ新たな事業が台頭する。この転換にあたって、地域固有の文化資源を発見し、再評価し、従来の産業が残した専門家や職人の知的所有・職

人技を活かしてネットワーク化し、新たな仕事を起こす傾向が強まっている。

- 2) 地域固有の中核となる文化資源を発見して活用する「目」をもつ人材が、都市や地元生まれ始める。農村生活や田舎のよさが再評価され、田舎に継承されやすい地元の自治の習慣が再生し、都市における市民組織やNPOなどと連携して、産直や交流の機会を創り出す。また、市民、自治体などのネットワークによって、事業を公正に評価する機関が生まれ、資源を評価し、公正な価格で（フェアトレード）販売する傾向が生まれる。また、共同で出資金や、補助金、寄付金を集める組織も誕生する。
- 3) これらの組織は、NPOや協同組合の事業として、分散した地域の多様な資源をネットワークによって結合し、消費者のニーズに応じて、伝統産業（陶磁器製品、漆器製品、金属技術、木材製品、建築物など）や、環境・リサイクル産業、芸術文化、福祉などに関わる産業を再生し発展させる。この際に、組織は、現代的な技術を活用することができるから、ラスキンの時代には存在しなかった高度な情報通信技術などを活かして、ネットワークを構築し、産業を再生する。
- 4) この組織は、現代に通用する製品やサービスを提供すると共に、伝統産業の技術やノウハウを活かし、かかるノウハウを担う職人を集め、教育し、現代技術との交流を深めて、新たな学校組織や大学、大学院とのコラボレーションを実行する。そして、新たな産業発展やビジネスにノウハウを提供し得る職人の発見や、育成に努める。
- 5) さらに、他地域や都市との交流の中で、中核となるべき文化資源の価値を評価し得る、専門家、芸術家などとの交流を進め、社会的な評価を確立する方向を目指す。
- 6) 職人や芸術家が活動するために、工芸センター、文化ホール、多くのミュージアム、文化施設、生涯学習のための学校、歴史的建造物の再生、公共交通機関の再生などによって空間の再構築を行い、地域社会、都市、まち、村などの再生を計画すること。また、再生に当たっては、ここでも、現代の高い技術を、可能な限り活用する。
- 7) 職人や芸術家による財やサービスは地域社会のシンボルであり、コミュニケーションや輸送機関などのネットワークシステムの支援や、多くの美しい景観や数々の遺産などを通じて、他地域の多くの旅行者や消費者をひきつける。
- 8) これらの文化開発の‘営み’を支援する、非常に多くの非営利組織が存在している。NPO、協同組合と地方自治体との連携を強め、企業や住民によるフィランソロフィーを発展させ、多くのボランティアと専門家の協力によって、都市や地域の再生をはかる。

IV 田園生活による都市の制御

‘田舎風の生活’の高い評価は、ヴィクトリア期、イギリス社会において提起された。

それは、元来、水車によって自然との共生を図りながらエネルギーを獲得し、穀物を挽く。職人技で、ウールを生産し、農産物、畜産物、手工業製品の市場を教会や仕事場の前に開く。

次世代は、自然という環境ストックから芸術的創造や科学的認識を学びとる。文化財のような伝統的建築ストックに住む人々が、伝統的な農業や職人技、商人の業を通じて教育する。

そして、人類が長い習慣の中で創りだした自治や共同占有の‘営み’の中で、ひとり一人が職人技や創造性を身につけ、その成果をともに楽しむ。これらの智慧や経験知を次世代に伝え、田舎風の生活を持続的発展させる。

しかし、この牧歌的な生活様式は、機械制大工業による科学技術の力と金銭蓄積の力を合体した都市の経済によって、一旦は解体される。水車は止まり、水は汚染され、織機は売り飛ばされ、職人は離散し、多数の農民は労働者となる。教育も地域の自然や文化から切り離される。

それにもかかわらず、農民は自立と自治の精神や伝統を失わなかった。ラスキンが「産業実験」の提起で示唆したように、かれらは、伝統的な生産や生活の様式を継承しながら、都市の市民と連携して、協同の組織を創り、都市の資金を農村に持ち込み、蹴散らされた文化資源をコーディネートして、産業実験に取り掛かる。

職人は呼び戻され、機械は買い戻され、水車が再生される。生産においては、伝統の技に加えて都市からもたらされた科学的知識や技術を活かす方策が講じられる。小さな市場には、地域通貨が相応しい。繊維の品質が向上して、都市や農村の新たな生活文化を支える。生産には、創造性が生まれ、消費には、創造から学んで、その享受能力が定着する。現代的で芸術的なデザインが生み出されて、新たな製品が市場を拡大してゆく。生活文化の質を上げながら、産業実験は、農村の再生を軸に、都市と農村の広域的連携を実現する。

都市と農村のネットワークは、巨大化に翻弄される都市生活を制御し、文明の独走を許さない。従って、*rural sustainability* は、「農山漁村風の‘営み’や動きを創造的に再生し、生産人の技術やデザインにおける創造性と、享受する人々の力量を持続的に再生産すること」、あるいは、現状に即して言えば、「持続的に再生すること」である。

rural sustainability は、「農山漁村風の‘営み’や動きを、創りだし享受する人々の力量を持続的に再生産すること」であった。この‘営み’には、その地の人々が創造する魅力としてのアメニティとは何か、このアメニティが、その地に人々をひきつけて、その地の人々のホスピタリティ、あるいは、ふるさとを愛する雰囲気を楽しむ習慣への共感を生む。

ここでは、従来の経済学でいう‘効用’‘使用価値’とは異質の価値概念が登場してくる。小林俊和氏は、‘アメニティの研究においては、人間の可能性や潜在能力の開発、あるいは人間発達にとって必要な雰囲気を持つ環境（自然的社会的）に、人々が誘われる（いざなわれる）装置あるいは、道を創ること、それらを創るにはどうすればよいかを考えるべきである」と指摘された。

氏によれば、ホスピタリティの語源の一つはフランス語に関わっていて、英語表現では‘ホスピス’である。そこでは、病と闘う人間の生命の可能性への挑戦がある。すなわち、医療、看護、介護の専門家が、生命の可能性に挑戦できる環境を、クライアントに提供することが‘ホスピス’である。そうすると、ホスピスへの志向を持つ人がクライアントと接する場がホスピタルであり、人々と場がうみだすアメニティを関係者が共有することをホスピタリティと定義できる6)。

単に‘おもてなし’をするだけではなくて、生命の可能性に対する希望を共有することによって得られる共感あるいは共歓のひろがりである。

かつて、このような‘営み’や動きは、アメニティ、ホスピタリティ、ドメインなどの新たな概念と共に、世界の農村において、各地の人々が試行錯誤しながら、習慣や伝統の現代的再生として、創りだして来た。これらの伝統や習慣は、日本では、「結い」と呼ばれ、西欧では、共同体 (Gemeinschaft)、コミュニティなどと呼ばれる。

それらは、人々の命と暮らしを再生産するために、自治や地域固有の資源を活かす習慣を生む。人々が考案した絆や‘繋がり’、および、繋がりを媒介する公務や共同業務、これは、かつては、共同体の経済外的共生と結合されて非民主主義的な雰囲気を残してきた。しかし、経済外的な強制が農地改革や民法の改正によって克服されると、これらの繋がりは、信頼できるコミュニケーションの共通基盤となった。この基盤の上での生産や消費は、創造性を生む。生産者の創造性と、享受者の受容能力が開発されて、ビジネスも、創造性を高め、人々の生活文化を高める財やサービスの創出へと発展する。

そこでの繋がりは、大規模機械・装置のように独自のエネルギー源を利用した動きを前提としない。むしろ、人間の‘等身大’の動きが中心であった。

そこでは、自治意識や自然に対する共同占有の自覚を背景に、職人技や、創意工夫、技術、技能、熟練、技巧、判断力、自律性の高い、モラルのある生活習慣、商習慣などが形成され、継承され、習慣や伝統の様式や作法、型が生み出された。これらの型には、自然に対する敬意や、人々の‘営み’に対する尊重など、道徳的な規範が存在し、人々によって共有されてきた。

自治のルール、礼儀や作法から医療、介護、教育、建築、祭りなどに至る型の形成は、個別的な人間生活の範囲を超えて、その地に固有の広がりを生み出す。このような「人々が育つ環境」の基礎の上で、個性的で、独自の生産の仕組み、享受の機会、など、多様な事業が展開される。

自治の伝統の上で、その地の生活文化の固有の広がりを共通の基盤とした人々のつながりが生まれる。この繋がりを前提として、その地の自然や土地に対する人々の関係は、「ふるさと」を共有し、‘共同占有’しているという独自の精神文化を生み出す。

独自のつながりと生活の技術を生かした、‘生きるための知恵’を基礎に、等身大の人間が私的に占有しうる小規模な範囲の個別的土地利用が、農業や居住用建築などのかたちで、行われる。たしかに、私有財産は拡大するが、実際の仕事は、自治と‘結い’による共同作業や、相互扶助、相互学習なくしては達成し得ない。人々は、自立の精神を私有制度から、協働の精神を自治と結いの習慣から学び取る。

このような関係は、まさに、「田舎風」であり、自然と人間が共生しつつ、人間同士も繋がり自律を兼ね備えた関係の中で育ちあうのである。

注

- 1) 大野 晃『限界集落と地域再生』(河北新報出版センター、2008年) 150ページ。
- 2) 高久多美男編集・中田宏コーディネイター『Japanist』第4号(2010年1月25日)、所収論文。
- 3) 同上、110ページ。
- 4) A. Fleming, 'Industrial Experiments in connection with St. George's guild,' 1870, J. Ruskin, *The Works of Ruskin*, Library Edition, Vol.30 pp.328-335.
- 5) 杉村和彦『21世紀の田舎学—遊ぶことと、作ること』世界思想社、2009年、31ページ以下。
- 6) 池上 惇ブログ「今日の話題 2010年1月7日 私の教育人生35(第三の道＝市民経済学) — 17 「市民経済がアメニティを創る」池上惇

参考文献

- Baumol W. J. & W. G. Bowen, *Performing Arts -The Economic Dilemma*, MIT Press, by the Twentieth Century Fund. Inc. The MIT Press, Massachusetts, 1966. (池上惇・渡辺守章監修訳『舞台芸術—芸術と経済のジレンマ』芸団協出版、丸善配本、1993年。)
- Caves, R. E. *Creative Industries, Contracts between Art and Commerce*, Harvard U. P., 2000.
- Enright, M. J. 'Organization and Coordination in Geographically Concentrated Industries,' in N. R. Lamoreaux and D. M. Raff, eds. *Coordination and Information, Historical Perspectives on the Organization of Enterprise*, NBER, The University of Chicago Press, 1997, pp. 103-111.
- Fleming, A. 'Industrial Experiments in connection with St. George's guild,' 1870, J. Ruskin, *The Works of Ruskin*, Library Edition, Vol.30 pp.328-335.
- 池上惇「文化産業の発展」後藤和子編『文化政策学』有斐閣、2001年。
- 池上惇・小暮宣雄・大和滋編『現代のまちづくり』丸善、2000年。
- 池上 惇『文化と固有価値の経済学』岩波書店、2003年。
- Ikegami, J. 'Value of Culture and Creative City Planning in Urban Areas', *Review of Cultural Economics*, Korea Association for Cultural Economics, Vol. 5, No. 2, Dec. 2002., pp.3-22.
- 池上惇「地域公共政策における文化資源の評価と財政問題」創刊号(『財政学研究改題』通巻第34号) 2003年10月、1-6ページ。
- 池上惇「都市再生と地域発展をめざす文化政策」『国際文化政策』創刊記念号、2008年6月。
- 植田和弘『廃棄物とリサイクルの経済学』有斐閣、1992年。
- 小林俊和『現代のエネルギー・環境政策』晃洋書房、2008年。

大野 晃『限界集落と地域再生』河北新報出版センター、２００８年。

Peacock, A. T. *Paying the Piper, Culture, Music and Money*, Glasgow U.P. , 1993.

Sen, A. *Commodities and Capabilities*, Oxford U.P., 1987

杉村和彦『２１世紀の田舎学—遊ぶことと、作ること』世界思想社、２００９年。

Throsby, D. *Economics and Culture*, Cambridge U. P., 2001.

（中谷武雄、後藤和子訳『文化経済学入門』日本経済新聞社、２００２年。）